

音楽と私

盛田 昭夫

(柳ソニー会長)



「音楽は心の糧」という言葉があるが、私にとっても、音楽は毎日の忙しい生活の中で心にやすらぎを与えてくれる。ただ私の場合は自分で楽器を手にしたり、いわゆる音楽通といったものではないから、もっぱらいい音楽を聴くことという注釈を付けておいた方がよいかも知れない。

幼児の頃から、母は「蓄音器」で色々な「洋楽」を私に聴かせてくれた。「チコンキ」と私が呼んだその機械は、私の一番好きな魔法の箱であった。小学校三年の頃だったろうか、親戚の一人が、「電気チコンキ」なるものを自作した。それは、まだ聞いたことのない壮大な音を発生する不思議なものだった。

それを聞いた私の父は、自分では音

楽に何の興味もないのに、子供には最高の音を聴かせるのだといって、当時日本に入ったばかりの米国製電気蓄音器を買った。

それがついに、私をして、家業の酒作りを継がずに今の仕事に走らせる結果になるとは、父も気がつかなかっただろう。

父は無趣味の方だったが、祖父は若い時からお洒落で、モダンで、若い私の母を「ストロー」^(注)という呼び屋の持つて来たイタリアオペラや、当時次に来日したジンバリスト、クライスラー、ハイフェッツといった有名音楽家の演奏会に必ず連れて行き、すっかり洋楽ファンにしてみました。

電気蓄音器のおかげで、母は好きな音楽を家で聴けると、レコードをさかの広大な土地にただレールが敷かれていただけというのは、この過密な東京の真只中で何ともつたない話である。

品川駅には大きな操車場や車庫があり、その上に広大な空間が遊んでいる。ここに第二国立劇場を建てたらどんなものだろうか。

品川は東海道線・横須賀線は勿論、山手線・京浜東北線から総武線まで国鉄が走っており、京浜急行は地下鉄と相互乗り入れしているなど、交通の便は最上である。パークイングの難しくなった東京では、電車の便さえよければ、むしろ電車を利用する方が便利である。それはまた、国鉄のお客を増やし収入増加に役立つであろうし、国立劇場から地代をとれば、国鉄は遊休空間の活用にもなる。

また、オペラが興業的に成り立たたないのは、舞台装置にお金がかかるからで、現在日本でオペラ上演に努力をしている二期会でも、一々セットを作りながら公演毎にそれを捨ててしまっているらしい。保存をするにもお金がかかるからである。そしてすぐ捨てるものだから結局はチャチな舞台になっってしまう。

んに集めたものだった。最初のレコードは、ラヴェルのボレロで、小学生の私も、世の中にこんな素晴らしい音楽があったのかと、強烈な印象をうけて、母と毎日毎日ボレロを聞きつづけたものである。

その頃は悠長なもので、出入のレコード屋さんは、毎月の洋楽新譜を一通り置いていて聴いてみて好きなのをお取り下さいという仕組みで、只で随分色々な曲を聞かせてもらった。

オスカーフリード指揮の「第九」合唱も恐ろしい程の感激を与えてくれた。中学生になった頃には、私もすっかりレコードづいてしまっていて、それが、もつといい音をと、自分で電気蓄音器といわゆる電蓄のとりことなったのが、間違いないもので、ついに電気屋になつたわけである。

どうして朝から晩までそんなに大きな音を出すのだ、と父によく文句をいわれたのだが、今日のこの頃では、同じ言葉が思わず息子に向かって私の口から出て、当時の父の気持ちが変わるような気がして苦笑している。

初めてオペラの全曲がレコードとなつて出て来たのも感激だった。八枚、十六面に入つた「カバレリヤ・ルスチ

外国では立派なセットを作つて、それが一幕ずつトレーラーに収められて保存されているという。

レールの上にオペラハウスがあれば、セットをコンテナに入れて、貨車の上に降ろせば、どこへなりと遠くへ運んで地代の安いところに保管も出来るのではないだろうか。

品川は、第一京浜国道にも面し、また高速の芝浦出口からも遠くない。こう考えると私は、これ以上適した場所は他にないのではなからうかと確信するようになってしまった。

私のオフィスに近いから、お前は勝手なことをいふのだと笑う人もあるけれども、それは別にして、私は「絶対」だこの頃思いつづけている。

問題は、関係当局や国鉄の方々が、私の説を少しでも本気で検討して見て下さるかどうかである。

さらにオペラハウスだけでは十分でない、オペラ団体も必要だろう。日本には素晴らしいオペラのグループ二期会がある。

二期会は、奇特定の音楽家の集りで、各々一流の芸術家でありながら日本にオペラを定着させるために、自分達の演奏活動の収入の一部を拠出しあつて、

カーナ」である。解説を読みながら、レコードに聴き入って、本物のオペラはどんなだろうかと、目に浮はぬ想像をしたものだった。

昭和二十八年、初めてニューヨークに行った私は、勿論メトロポリタンに駆けつけた。天井桟敷の立見席で、はるか眼下の舞台を見たのだが、本物のオペラハウスの豪華な雰囲気は圧倒されたのか、何のオペラを見たのか思い出せない。私の興味、関心の中心がオペラそのものから商売へ移つてしまつていたためだろう。それ以来、外国で折さえあればオペラを見てきたし、音楽家の中にも友人が多くなつて、機会はいくらでもあるのだが、今もつていわゆる「通」といわれる人のように、何時、どこで、誰の、何をとソラでいえるタイプではない。

オペラは歌舞伎と同じで、同じ物を何度見ても楽しめる。機会がある時に見られるものを楽しんで、日頃忙しい私の気分を転換出来るのが私の楽しみ方で、全部語んじたり記録したりするようなマメな気持ちはおこらないのである。

東京は有難い所で、この頃は世界中から素晴らしいオペラが、しかも一流

日本人のため、日本語で、古典のオペラを、日本人の手で上演してくれ、その努力に対して、私達も何かの力になつてあげたいと考えている。

どこの国でも外からの援助なしではオペラはやってゆけない。金持がサポートしてくれるアメリカは勿論、ヨーロッパ諸国でも、国か地方自治体のサポートによつてのみオペラは持続出来るのである。

世界の一流オペラ界で堂々と活動する多くの日本人音楽家を出しながら、オペラハウスも持たず、オペラ団体に援助もしないでは、一流文化国家と称するには余りにも恥ずかしい気がするのである。

オペラファンの一人として関係当局の理解を切望するとともに、日本にも新しい文化の遺産を出来るだけ早く、実現したいものである。

* * *

*

*